

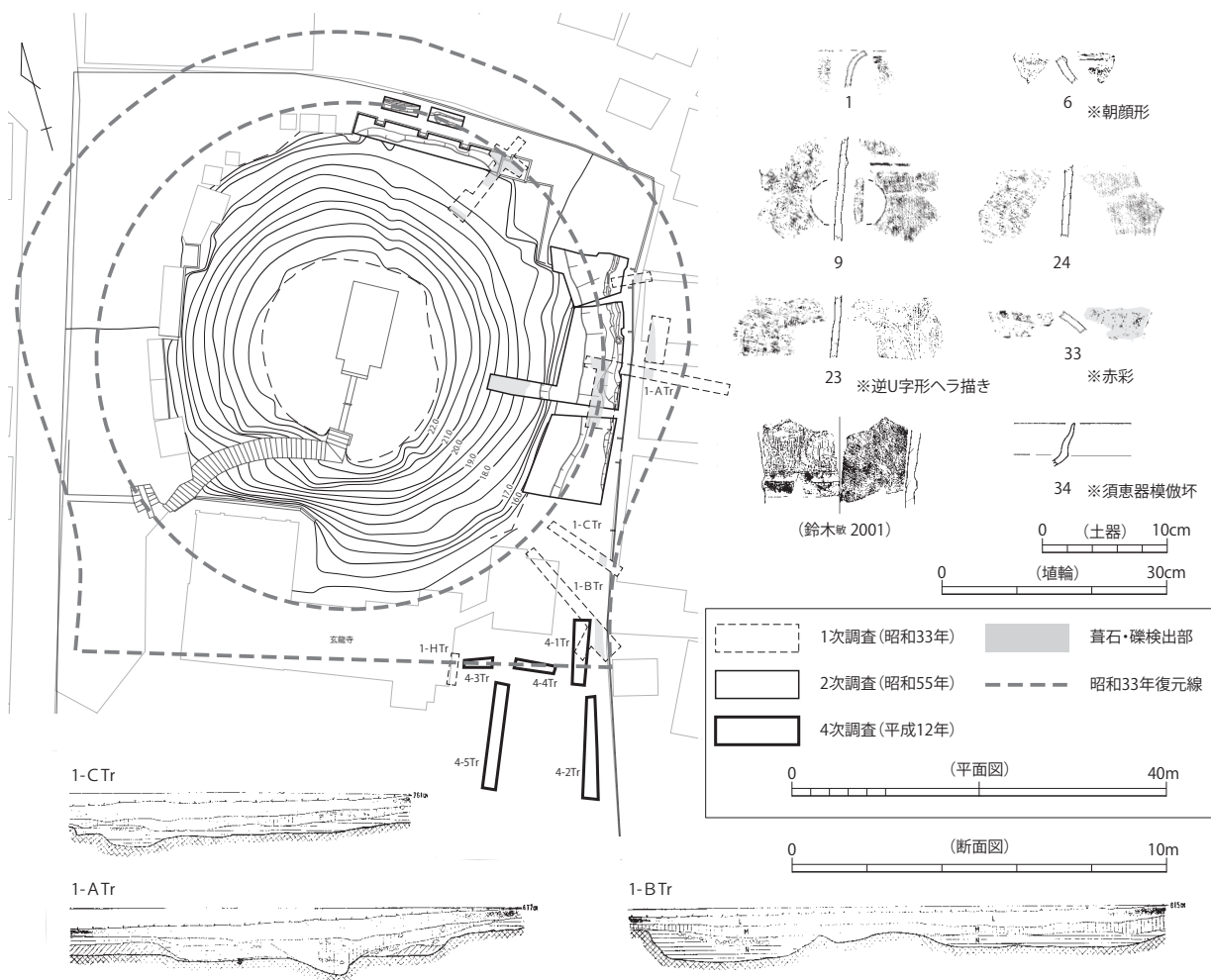
第2節 古墳時代後期初頭における2つの首長墳とその評価

1. 伊勢塚古墳の調査成果とその課題

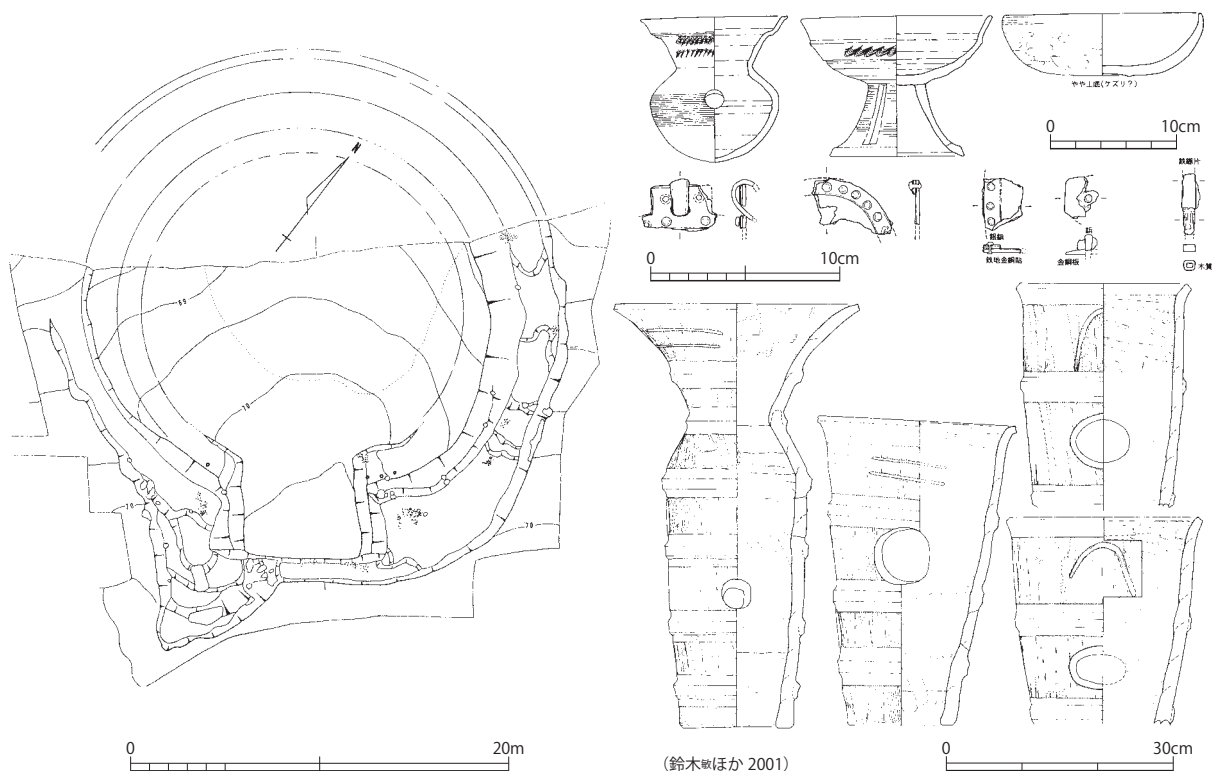
平成12年度に実施した墳丘南東側の調査によって、基盤層の落ち込み（1トレンチ）と若干の埴輪片、土器片を検出することができた。未報告の埴輪が多数存在する当古墳において、今回その一部でも報告できた意義は大きいと考えるが、埴輪の内容はもとより、これまでに検出された遺構についても多くの問題を残していることも、また改めて認識することができた。ここではそれらの問題点を整理し、今後の研究の進展や調査に備えたい。

墳形と周溝の問題 まず墳丘については、盛土主体¹⁾で築かれ、葺石を伴う二段築成の円墳であることが想定されているのであり、その直径は54 m、高さは南から8 m、北から6 mを測る²⁾。墳長については、同調査において検出された墳丘東側で幅8 mを測る周溝（1次

調査Aトレンチ）の形状からの復元値であり、この周溝が南側で大きく開いて「楕形」の周溝となることが推定されたのであるが、この際に問題となる南東側のトレンチ（1次調査Bトレンチ）の土層図では、西端（土層図左手）に幅4.5 m程の基盤層の落ち込みが認められるものの、中ほどで一度立ち上がり、さらに東側（土層図右手）においてなだらかな落ち込み状を呈するのであり、復元図のとおりトレンチの大部分を周溝内と捉えるには疑問が残る。1次調査報告ではさらに墳丘南側に設定したHトレンチによって、「楕形周溝」の根拠となる周溝外縁の立ち上がりを検出したとしているが、このトレンチについては土層図も報告されておらず、現状でこの想定を追認するすべはない。今回の4次調査では1次調査BトレンチからHトレンチの間にいくつか調査区を設



第118図 伊勢塚古墳の墳丘と出土遺物（1：800、1：200、1：10、1：6）



第119図 伊豆の国市多田大塚6号墳の墳丘と出土遺物（1：400、1：6、1：4、1：10）

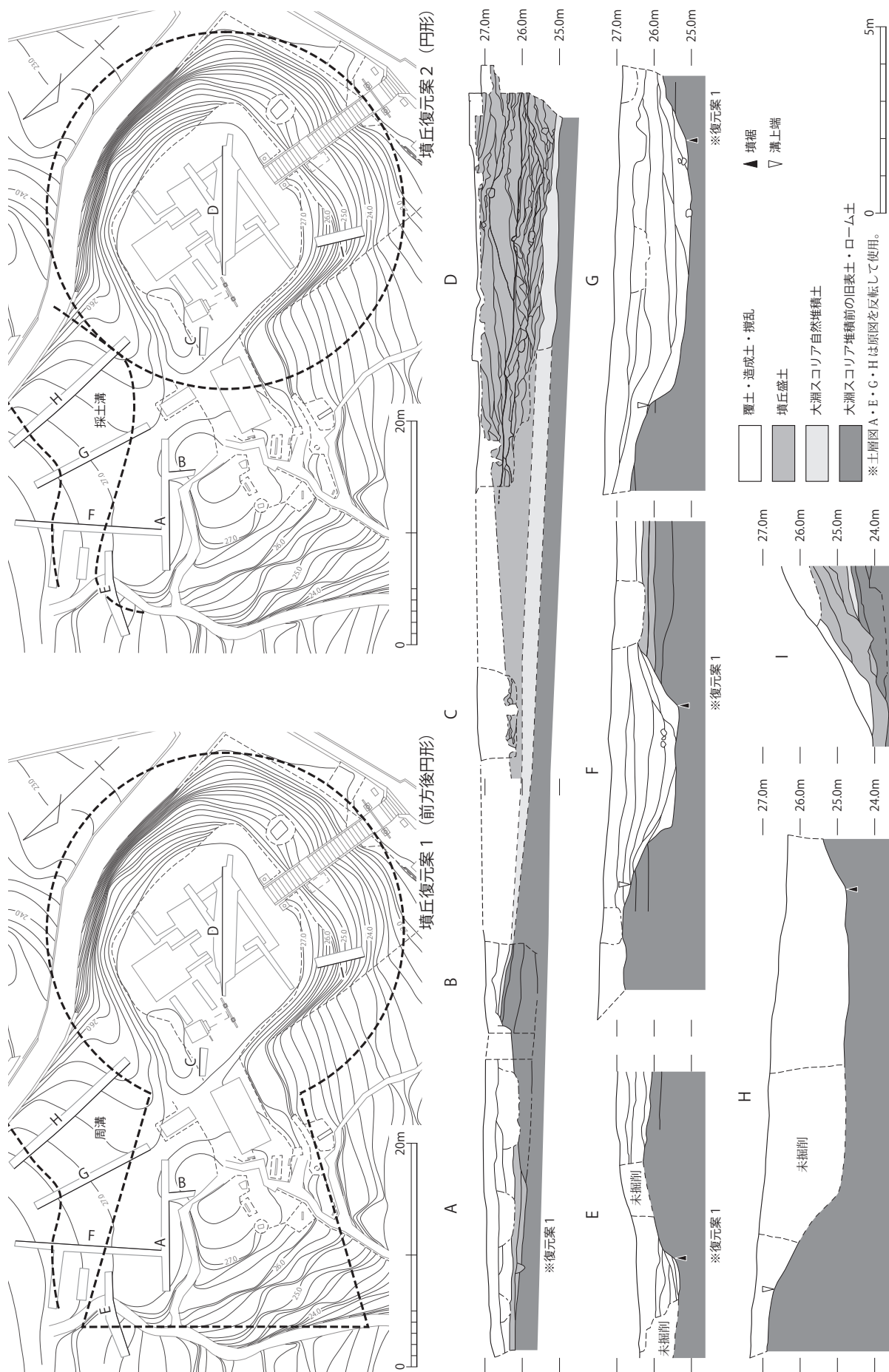
けているのであるが、近年の削平のためか、1次調査報告の想定する周溝外縁等の遺構を検出することはできなかった。ただ、1次調査Bトレンチで確認されたトレンチ中ほどの高まりが、今回の4次調査1トレンチにおいて検出された基盤層の落ち込みに対応する可能性はある（第78図、p57）。

伊勢塚古墳の墳形に対し、帆立貝形前方後円墳³⁾や造り出し付き円墳⁴⁾といった想定がなされる根拠は、1次調査で得られた「楕形周溝」という知見から導かれたものであり、上述したように周溝の形態に議論の余地があることからすれば、今後も慎重に判断すべき問題であろう。

遺物の問題 伊勢塚古墳の埴輪については、これまでに低平な断面M字形の突帯の個体などのV期の円筒埴輪片4点が報告されているが⁵⁾、今回の報告では、円筒埴輪にも普通円筒と朝顔形の2種があり、色調や胎土が異なる個体も存在すること、また赤彩のある形象埴輪が存在すること、そして断面三角形となる低平な突帯のものが目立って存在すること等が確認された。低平な突帯の個体のなかには、粘土帯を貼るのではなく、強いナデによって突帯を作り出すものもあり、突帯については形

骸化の度合いが強い。ただ、外面のタテハケや焼成の状況、口縁端部の作りから粗雑な印象を受けることは決してなく、推定ではあるものの、円筒埴輪にも大型品・小型品の区別が存在する可能性もあることから、大型古墳に供給された埴輪としては申し分ないものといえる。

また逆U字形のヘラ描きのある個体が確認されたことも貴重な成果であり、近隣では伊豆の国市多田大塚6号墳の埴輪に類例が認められる。同古墳は墳丘全長が25m程となる造り出し付き円墳であり、人物埴輪や低位置突帯の特徴から、駿河地域の他の類例同様、関東系の埴輪群を有する古墳として捉えられている⁶⁾。築造時期については、造り出し部周辺から出土した須恵器からTK47型式併行期頃と考えられよう。伊勢塚古墳1次調査における周溝形態の復元が正しければ、墳形・埴輪ともに大いに参考となる資料であり、築造時期的にも伊勢塚古墳4次調査で確認された須恵器模倣坏の年代観とも矛盾しないとみられる。今後、多田大塚6号墳の埴輪との詳細な比較と分析をする必要はあるが、現在のところは従来の想定のとおり、伊勢塚古墳についてもTK47型式併行期頃に位置づけることが妥当であると考えられる。



第 120 図 天神塚古墳墳丘復元図 (1:500)・土層図 (1:150)

2. 天神塚古墳の墳形と築造時期

天神塚古墳については、1999・2000年に実施した2度の確認調査によって、主体部の確認や古墳に直接伴うと判断される遺物の発見にはいたらなかったものの、墳丘北側の溝状遺構や墳丘盛土（「後円部」）の構築状況、下層集落の存在を窺わせる遺物など、いくつかの重要な知見を確認することができた。天神塚古墳の全容解明や性格の考察には依然として情報が不足している感否めないものの、現段階で判明している事項に基づいてその墳丘や築造時期の問題を整理しておきたい。

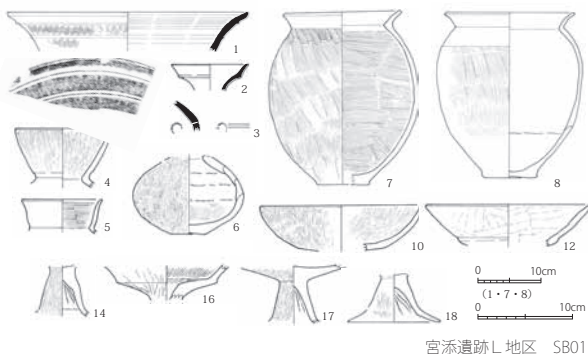
墳丘の復元 天神塚古墳の墳丘については、1930年刊行の『静岡県史』では前方後円墳として認識されているものの、1972年刊行の『吉原市史』では『県史』の前方後円形との指摘に疑問が呈されるなど、不明瞭な状況であった⁷⁾。初の発掘調査報告となる2001年の1次調査報告では、墳丘北西側を重点的に調査し、前方後円墳として認定するにいたっているが⁸⁾、以前より不明瞭であった「前方部」西側から南側の調査が十分でないために、即断するには不安も残る。報告では1次1トレンチ（第120図セクションA）や1次2トレンチ（同セクションF）において墳丘盛土が確認できたとされるが、今回の2次調査で確認された東側「後円部」盛土

と比べると非常に薄いものであり、その評価は慎重にならざるを得ない。北側をめぐる溝（同セクションH・G・F）についても、推定「くびれ部」においてコーナーを検出していないため、前方後円墳の周溝と決定するには時期尚早であろう。しかし、後にも述べるとおり天神塚古墳の盛土は大淵スコリアの自然堆積層の上から構築されており、北側溝の覆土にも大淵スコリアが多量に含まれることから、溝の開削は墳丘構築前後いずれかの間もない時期と考えられる。したがって溝自体は古墳に伴う遺構であった可能性は高い。

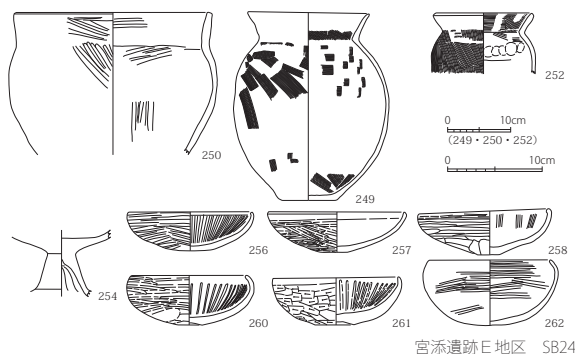
以上のことから、今回の報告では墳丘の復元案として、前方後円形となる復元案1とともに、墳丘が円形で北側に採土溝がめぐる復元案2を示すこととした。墳丘規模については便宜的に1次調査のものを踏襲し、円形部分は直径32m、方形部分については長さ19.5m、最大幅25.5mとしている。ただ、「後円部」の東～南側については現状地形から推定されたものであり⁹⁾、近世以降の神社地造成の影響も多分に考慮する必要があるため、今より一回り小さい墳丘となる可能性もある。いずれにしても、墳丘周囲における墳裾的確定確認を経て、今後も墳形を検証していくことが求められる。

築造時期 天神塚古墳の築造時期については2001年

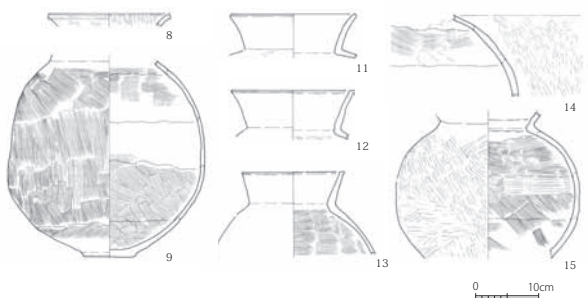
スコリア降下前の土器



宮添遺跡L地区 SB01

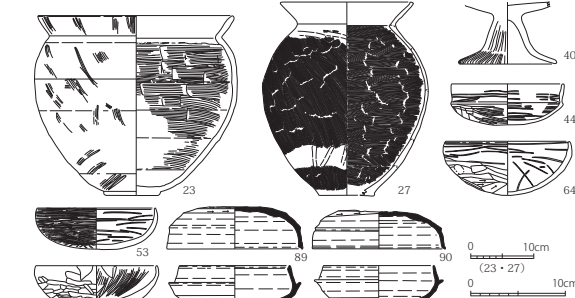


宮添遺跡E地区 SB24



柏原遺跡6地区 大淵スコリア直下

スコリア降下後の土器



宮添遺跡D地区 SB11

第121図 大淵スコリア降下前後の土器（1：12、1：8）

時期区分		古墳時代前期			古墳時代中期					古墳時代後期					
土器編年		大 廓 式			中身代式			須恵器							
		Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	TK73	TK216	TK208	TK23	TK47	MT15	TK10	TK43…
出土層位	旧表土～大淵スコリア層				Ⅱ								Ⅲ		
	墳丘盛土内	Ⅱ											Ⅱ		
	層位不明	Ⅱ											Ⅲ		
歴史事象													下層集落（天念寺遺跡）の消長		
													◀---▶ 大淵スコリアの降下		
													◀---▶ 天神塚古墳の築造		

第122図 天神塚古墳出土遺物の編年の位置

の1次調査報告において、「後円部」盛土下に存在する大淵スコリア（第120図セクションI）の年代観から「概ね5世紀末から6世紀前半頃」¹⁰⁾とされているが、近年の調査の蓄積によって、富士山南麓から噴出したとされる大淵スコリアの年代観も定まりつつある¹¹⁾（第121図）。

愛鷹山南西麓に所在する富士市宮添遺跡では、これまでの調査において竪穴建物跡の覆土内に大淵スコリアのみで構成される層を含むものが複数検出されている。L地区SB01では床面から10～20cmほど上層となる覆土中位において大淵スコリアの純粹堆積層が確認されており、建物内からはTK208型式とみられる須恵器甕や甕の破片が出土した¹²⁾。またE地区SB24では、やはり床面より10cmほど上層の覆土中位において大淵スコリアの純粹堆積層が確認され、建物内から須恵器の出土はなかったものの、駿豆型の坏や甕等によって構成される良好な土器群が出土しており、須恵器模倣坏を主体的に含まない組成から、TK23～TK47型式併行期以前に位置づけられる¹³⁾。なお、富士市柏原遺跡においても大淵スコリアの純粹堆積層直下から一定量の土師器が見つかり、上述の年代観と矛盾しないと考えられる¹⁴⁾。一方、大淵スコリア降下時期の下限を知る上で、大淵スコリアの純粹堆積層を含まない建物跡にも注目する必要がある。宮添遺跡D地区のSB11は、覆土内に大淵スコリアの純粹堆積層はみられないものの、大淵スコリア自体は疎らに含むことから、スコリア降下後に営まれた竪穴建物跡と判断される。出土遺物はMT15型式の須恵器蓋坏のほか、土師器の須恵器模倣坏、駿豆型坏などがある¹⁵⁾。

大淵スコリアの純粹堆積層が検出された2例の建物跡は、いずれも床面直上ではなく覆土中位において確認されていることから、建物廃絶後の一定期間の後に大淵スコリアが降下・堆積したことを物語っている。したがって、

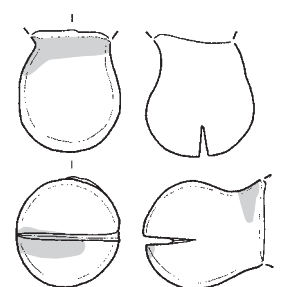
宮添遺跡D地区SB11の示す年代が堆積の下限となるのであれば、実際の降下時期はTK23～TK47型式併行期頃に現状では押えられることになる。

このような前提の上で、いま一度天神塚古墳の出土遺物の時期を確認してみたい。今回報告した1次・2次調査の出土遺物は、その帰属時期の広さから、古墳築造時の遺物が含まれている可能性は多少残るものの、大部分は古墳築造以前の下層集落に伴う遺物であると判断される。第122図で示したとおり、墳丘盛土内の遺物と古墳築造以前の旧表土以下の遺物の時期は概ね一致しており、天神塚古墳は古墳時代前期から後期初頭にかけて周辺に存在した集落（天念寺遺跡）の上に、その集落の土を用いて墳丘を造成・盛土したことが想定されるのである。ここで注意したいのは、天神塚古墳の盛土直下には大淵スコリア層が存在することであり、先にみた降下時期は、天神塚古墳で検出された遺物の時期の下限と見事に一致している。以上のことから、下層集落の衰退→大淵スコリアの降下→天神塚古墳の築造という一連の過程が推定されるのであり、古墳の築造時期はTK47～MT15型式併行期に設定することができる。

下層集落である天念寺遺跡自体は発掘調査履歴がなく、今回の知見のみで多くを語ることは憚られるものの、富士山の側火山の噴火がもたらした大淵スコリアによって当該集落が大きな被害を受けた蓋然性は高く、天神塚古墳の築造自体が、愛鷹山南西麓の地域における火山災害からの「復興」を象徴づける事象であった可能性もある。

3. 東駿河地域における後期古墳文化の導入と契機

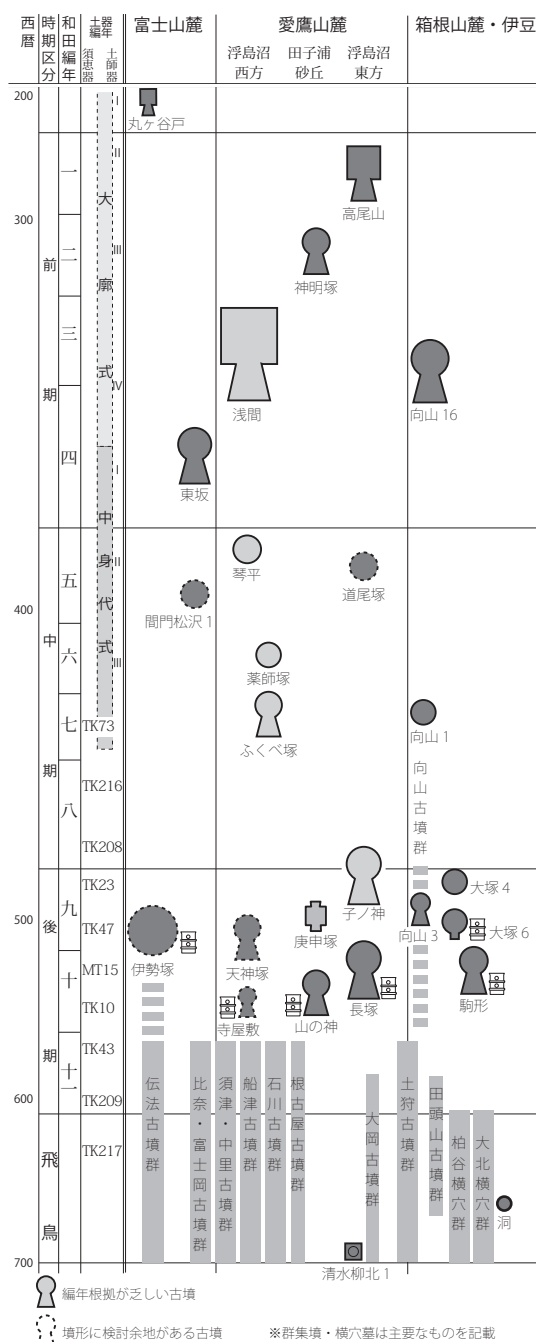
前項までで確認してきたとおり、伊勢塚・天神塚の両古墳は、ともに6世紀初頭を前後する時期（TK47～MT15型式併行期）に築かれていたことを改めて確認することができた。古墳時代後期のはじまりをTK23型式



寺屋敷古墳出土埴輪



第123図 寺屋敷古墳出土遺物 (1:3)



第124図 駿河東部・伊豆地域における古墳の変遷

併行期とするか MT15 型式併行期とするかで議論はあろうが、新興の中小首長層の台頭¹⁶⁾とその首長墳の小地域単位での並列的な造営¹⁷⁾が進行する当該期は、当地域においても重要な画期であると考えられる。ここで、当該期の首長墳の類例をもう一つ報告しておきたい。

寺屋敷古墳と形象埴輪 第123図に示した形象埴輪片は、富士市立博物館の収蔵庫に寺屋敷古墳(中里 K-93 号墳)出土の埴輪として保管されてきた資料である。馬形埴輪に伴う鈴であり、長さ 4.9cm、幅 4.2cm を測り、正面・側面には横方向の切れ込みが入る。科学分析はおこなっていないが、トーン部分は赤色顔料の痕跡となる可能性がある。鈴の法量は伊豆の国市多田大塚 6 号墳例よりはひと回りほど大きく、同市駒形古墳例のうち、大型のものに近似する。形態はすべて類似しており、古墳時代中期末から後期のものとして差し支えない。

寺屋敷古墳とは、本書 38 頁記載の中里 2 古墳群の概要でも触れたとおり、天神塚古墳から北西へ 400 m ほどの地点に存在したとされる古墳である。墳形は前方後円形または楕円形とされるが、主体部はベンガラが敷き詰められた幅 4 尺、長さ 13 尺の東南に向いた大石室であり、天井は一枚の平石であったとの伝承が残されている¹⁸⁾が、既に完全に消滅している。天井石の解釈は悩ましいが、おそらくは竪穴式石槨や箱式石棺等の埋葬施設なのであろう。発掘前から埴輪片が採集されたとの記述もあり、一定量の円筒埴輪や形象埴輪が存在したようである。近接する天神塚古墳では埴輪は採用されていないことから、その次代の首長墳と考えられ、MT15 型式～TK10 型式併行期頃の時期が与えられる。

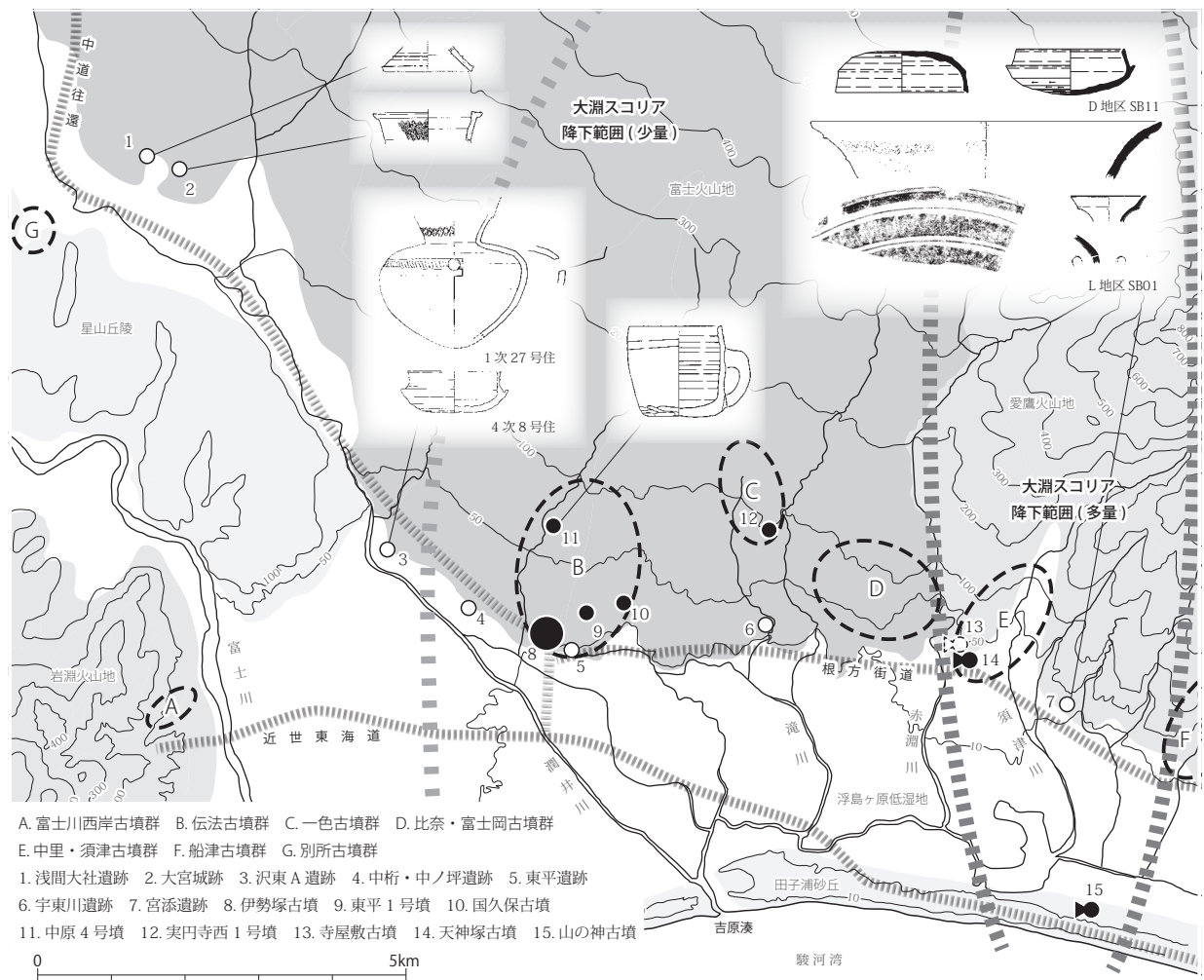
面的な埴輪受容 寺屋敷古墳の埴輪の内容の一端が明らかになったことにより、これまでに古墳時代後期初頭前後の首長墳(天神塚古墳)の存在が確認されていたながらも埴輪空白地帯と考えられていた中里・須津の古墳群においても、埴輪を樹立した首長墳の存在を確認することができた意義は大きい。駿河東部地域で当該期に初めて受容されたこれらの埴輪の生産には、低位置突帯や焼成¹⁹⁾、人物埴輪の製作技法²⁰⁾から関東系埴輪工人集団の関与が指摘されているところである。その詳細は資料全体の分析を通じて今後も検証すべきではあるものの、各小地域を単位とした中小の首長墳における面的な埴輪受容の状況(第124図)は、滝沢誠氏が指摘したとおり、新興地域首長層を媒介としたヤマト王権による新しい支

配秩序の現れということを窺わせるものである²¹⁾。

潤井川流域の開発 ここで、潤井川流域周辺の当該期集落の様相も確認しておきたい(第125図)²²⁾。古墳時代前期から集落が営まれた星山丘陵周辺や浮島沼周縁地域に対し、古墳時代中期から後期になると、潤井川東岸の微高地上に新たにまとまった集落が形成されるようになり、それらは「潤井川流域における古墳時代後期の開発の跡」とも評される²³⁾。そのような集落遺跡からは、5世紀代の「初期須恵器」(第125図)やカマドを有する竪穴建物跡(富士市沢東A遺跡、中桁・中ノ坪遺跡)、子持勾玉や石製模造品を用いた祭祀(沢東A遺跡)が確認されており、王権との関連性を有した先進性の高い文物を積極的に利活用した集団によって、潤井川流域の開発が進められていたことが窺われる。現潤井川下流域と富士川下流域の間の扇状地デルタ地帯は旧富士川の氾濫原に相当しており、沢東A遺跡等の潤井川下流東岸の集落は「旧富士川」渡川の際にも重要な役割を果たし

ていたであろうことは想像に難くない。また潤井川河口部には駿河湾へと繋がる津²⁴⁾(旧吉原湊、現田子の浦港)があることも考慮すれば、沢東A遺跡や中桁・中ノ坪遺跡、東平遺跡のラインによって、地理的・経済的に重要な拠点を形成していたことが推定されるのである。

大淵スコリアの降下と新興首長層の台頭 富士山南麓の側火山の噴火によって大淵スコリアが噴出・降下したのは、上述した古墳時代中期以降の潤井川下流域の開発に一定の目処がつきつつあったTK23～TK47型式併行期のことであり、この災害イベントが駿河東部地域に与えた動揺は、小さくなかったものと考えられる。厚いスコリアが堆積した愛鷹山麓南西部では、宮添遺跡のような古墳時代前期以来の拠点集落は継続し、降下した火山灰の上には新興の首長墳として天神塚古墳が築かれ、次の首長墳である寺屋敷古墳では埴輪も採用されることになる。関東系埴輪の存在が確認されている田子浦砂丘上の富士市山の神古墳や、愛鷹山南東麓の沼津市長塚古墳



第125図 潤井川流域周辺における古墳時代中期から後期の集落と古墳 (1:100,000)

も、スコリア降下後の古墳とみられる。そして、新たに開発が進んだ潤井川下流域では、その象徴的な要衝地に伊勢塚古墳が築かれるのである。このようにみえてくると、潤井川下流域から浮島ヶ原低地周辺において中小首長層が台頭する状況の背景を考える際、ヤマト王権に連なる集団による潤井川流域の如き低地部開発の推進とともに、大淵スコリアの降下のような当該期の自然災害の影響についても重要な因子として積極的に検討する段階にきているのではないだろうか。

当該期における自然災害は富士山の噴火以外にも、富士川河口断層帯の活動とそれに伴う浮島沼の水位上昇²⁵⁾や、関東では榛名山の噴火による保渡田古墳群の解体²⁶⁾とも重なっており、東日本規模において自然災害に起因する不安定な生活環境に陥っていたことが想像される。こうした背景があったからこそ、新しい古墳文化や新興の首長を受け入れるための地域的素地²⁷⁾が形成されていたとも考えられるのである。

古墳時代中期から後期への変革期に、富士山と榛名山という東日本を代表する2つの火山が活動している事実は極めて重要であり、この災害イベントが、地域史や災害史の枠にとどまらず、日本列島史を構築していく上でも今後積極的に評価されていくことが求められている。

注

- 1) 志村 博「伊勢塚古墳周溝緊急発掘調査報告」『富士市埋蔵文化財発掘調査報告書』富士市教育委員会、1983年。
- 2) 後藤守一ほか「伊勢塚古墳」『吉原市の古墳』吉原市教育委員会、1958年。
- 3) 注1文献。なお、静岡大学文学部考古学研究室所蔵の伊勢塚古墳測量図（1955年頃測量）によると、南側に墳丘がさらに張り出す帆立貝形前方後円墳のような姿が記録されているが、同時期に測量された『吉原市の古墳』掲載の墳丘や周辺地形との差が大きすぎるため、真に伊勢塚古墳の実測図かどうかを慎重に判断する必要がある。
- 4) 静岡県教育委員会『静岡県の前方後円墳―資料編―』静岡県文化財調査報告書第55集、2001年。
- 5) 鈴木敏則「埴輪」『静岡県の前方後円墳―総括編―』静岡県文化財調査報告書第55集、2001年。
- 6) 鈴木敏則ほか「多田大塚古墳群・芋ヶ窪古墳群発掘調査報告」『静岡県の前方後円墳―個別報告編―』静岡県文化財調査報告書第55集、2001年。
- 7) 静岡県『静岡県史』第壹巻、1930年。
中野国雄「浅間古墳とスルガの国」吉原市『吉原市史』上巻、1972年。
- 8) 志村 博「天神塚古墳（富士市）」静岡県教育委員会 編『静岡県の前

方後円墳 - 個別報告編 -』静岡県文化財報告書第55集、2001年。

- 9) 注8文献。
- 10) 注8文献、p.169。
- 11) 佐藤祐樹「弥生～古墳時代における宮添遺跡を取り巻く社会構造の変化」『宮添遺跡Ⅳ』富士市教育委員会、2011年。
- 12) 佐藤祐樹ほか『宮添遺跡Ⅴ』富士市教育委員会、2012年。
- 13) 佐藤祐樹ほか『宮添遺跡Ⅳ』富士市教育委員会、2011年。
- 14) 藤村 翔「富士市・柏原遺跡（第6地区）の発掘成果について」『静岡県考古学通信』No.57、2012年。
- 15) 佐藤祐樹『宮添遺跡Ⅲ』富士市教育委員会、2010年。
- 16) 和田晴吾「古墳時代は国家段階か」都出比呂志・田中 琢編『古代史の論点4 権力と国家と戦争』小学館、1998年。
- 17) 滝沢 誠「神明塚古墳と周辺の大形古墳」『神明塚古墳（第2次）発掘調査報告書』沼津市史編さん調査報告書 第15集、沼津市教育委員会、2005年。
- 18) 静岡県『静岡県史』第壹巻、1930年。
中野国雄「浅間古墳とスルガの国」吉原市『吉原市史』上巻、1972年。
- 19) 注5文献。
- 20) 稲村 繁「沼津長塚古墳採集の人物埴輪」『埴輪研究会誌』第7号、2003年。
- 21) 注17文献。
- 22) 初期須恵器実測図の出典
大宮城跡・浅間大社遺跡：渡井英誉ほか『富士宮市の遺跡Ⅱ』富士宮市文化財調査報告書第30集、富士宮市教育委員会、2003年。
沢東A遺跡：（1次）久松義昭『沢東A遺跡発掘調査概報』富士市教育委員会、1992年。（4次）志村 博ほか『沢東A遺跡・第Ⅴ地区』富士市教育委員会、1997年。
中原4号墳：鈴木敏則「静岡県内における初期須恵器の流通とその背景」『静岡県考古学研究』No.31、静岡県考古学会、1999年。
宮添遺跡：（D地区）注15文献。（E地区）注13文献。（L地区）注12文献。
- 23) 渡井英誉「まとめ」『東田遺跡』富士宮市文化財調査報告書第40集、富士宮市教育委員会、2009年。
- 24) 原 秀三郎「物部氏・膳氏・多氏の土着と駿河国」『沼津市史 通史編 原始・古代・中世』沼津市、2005年。
- 25) 小松原純子ほか「静岡県浮島ヶ原低地の水位上昇履歴と富士川河口断層帯の活動」『活断層・古地震研究報告』第7号 独立行政法人産業技術総合研究所、2007年。
- 26) 若狭 徹「中期の上毛野 ―共立から小地域経営へ―」右島和夫ほか編『古墳時代毛野の実像』季刊考古学・別冊17 雄山閣、2011年。
- 27) 注11文献。